

絵画と家具を備えた家の地下を降りてゆくと洞窟に行きあたり、古代人の生活の痕跡と二つの頭蓋骨を発見する—そんな夢の記憶、精神の襞に目と手を介して繊細に分け入るようなあり方が小田の作品にはある。しかしそうした作品によくある内向きさは感じません。小田の作品には鑑賞者の想像力に向けて多孔的にひらかれたところがある。映画館を出たあと私を包む光景はすっかり変質し、私に世界に参加させなおすような感覚をもたらす。そんな想像の「ひらかれ」が現実世界に作用してゆく過程において、小田によるアナログ・フィルムカメラとデジタル・ビデオカメラを組み合わせて行う「イメージ考古学」的な制作の手法はきわめて的確に機能しているように見えます。小田の「目—映画制作」に「手—絵画や立体作品制作」が重なるとき、作品は私と私たちとの境を混ぜこぜにし、夢みることと生きることとの間の深い穴を埋め、新たな畝を立てなおしてゆくための動的な媒体(メディアム)となる。colere-ONでの制作がどのような作品に結実するかが楽しみです。

colere-ON×弘前大学教育学部有志は、colere-ONの普段の活動をより充実化させるトライアルを作品展開としています。施設の運営母体である「社会福祉法人あーんど」は、大橋一之代表による「障害をお持ちの方が親亡き後も一生地域で暮らし続けられる社会を創る」という思いのもとにできた団体。そこでは障がいを個性によみかえ、その個性を手がかりにつながることの可能性を模索し、その先に持続的な社会の構築を目指そうとする壮大な思いがあります。この思いを形にすることに参画せずして「地域にアートの魅力を伝える」ことはあり得ません。新型コロナウイルス感染症拡大の余波を受け、施設内は一般公開できない現状にありますが、期間内に行われる予定のイベントは、記録に残しておく予定です。ここでの出来事がやがて地域におけるcolere-ONの成長として実を結ぶことを願いつつ…今はまだ、全てが未来に向けてひらかれた途上にあります。

「美術館堆肥化計画」へ

かつて東北岩手の詩人・宮沢賢治(1896-1933)は「羅須地人協会」の名のもとに芸術に親しみ、物々交換や畑仕事をもとに住民同士が素朴に暮らす共同体を夢みて、短期間のうちに挫折しました。その挫折は何に起因するのか。それは生活と芸術の融合を急ぎ過ぎたことにあるように思えてなりません。地域の現実の外から芸術を「そのまま」持ち込んでも、そこに発生するのは分裂である。ならば地域の現実と連続したところに外から来た芸術を沿わせることから始め、生活と芸術の地道な統合から地域に根ざした新たな芸術表現のあり方を地域・アーティスト・美術館が協働で計画しよう。こうしたことをなるべく具体的に準備し、促進しようとする部分に「美術館堆肥化計画」の本義があります。人知れず土を耕し続けるみみずの働きが世界を肥沃土で覆うように、この津軽地域における人＝アーティスト＝みみずの活動が、いつか世界に生態圏としてのミュージアムをもたらすことを信じて、今はこの堆肥化をいっそう促進してゆきたいと考えます。

“それは君 大変おもしろい 君 ひとつやってみたまへ”(*3)

*3 青森県平内町出身の「ミミズ博士」畑井新喜司(1876-1963)が折にふれて弟子たちに語った言葉

編集・執筆・中面下図＝奥脇嵩大(青森県立美術館学芸員/本事業担当)

発行・印刷＝青森県立美術館

発行日＝2021年10月2日

©Aomori Museum of Art

(本事業の詳細は美術館ウェブページもご覧ください。本紙のDLも可能です)

<http://www.aomori-museum.jp/ja/event/composting2021>



美術館 堆肥化計画

Museum
Composting
Project

堆肥化促進ノート

—「旅するケンビ」解説

—「耕すケンビ 津軽編：みみずの足あと」解説

「旅するケンビ」解説

2021年の県立美術館PR展示「旅するケンビ」は、ケンビ(県立美術館)を特徴づけるデザインの要素を津軽地域に持ち込み、地域ゆかりの資料である偽石器や開拓農家・竹内正一さんによる十三湖干拓の記録写真と組み合わせて紹介する展示です。ELMや中泊町博物館といった地域ゆかりの施設で展開される本展示は、「地元にいながらにして県立美術館的な体験ができること」を目指して構成されます。その意図するところは必ず、**美術館と地域の現在とを混ぜこぜにしていく**ことです。そもそも堆肥とは、「様々に集まった有機物を微生物が分解してできた肥料」を指します。ならば「美術館が地域の〈肥やし〉となることを目指す」本事業がまず取り組むべきは有機物-人間の営みとしての美術館活動を地域に持ち込み、地域の社会と自然との間で混ぜこぜにして考えることです。

地域ゆかりの資料の役割について

「旅するケンビ」では、美術館的な要素を地域ゆかりの資料とともに地域で展示することで、美術館に地域の文化的土壌を整える媒体(メディウム)のような役割を期待しています。そうしたことを地域の側から促進する動力として、今回特別に紹介する五所川原で採集された**偽石器**や**十三湖干拓の記録写真**があります。1953年、明治大学の杉原荘介らにより金木町(現・五所川原市金木)の藤枝溜池南岸付近の砂礫層から発見された「石器」は、一時旧石器時代に遡るものとして話題になりましたが、後に地中での石同士のこすれあい-「自然の営み」によって砕けた石片であることが分かりました。今ではかえりみられることも少なくなったこの「偽石器」を、今回「旅するケンビ」では自然の営みと人間の想像力の混成物と再定義し、溜池付近からごく少量を表面採集して展示します(*1)。

中里(現・中泊町中里)を含む十三湖周辺は、1948年~63年の間、東北初の国営干拓事業が実施された土地です。腰切田とも称される水はけの悪い泥炭地帯を豊かな田園地帯へと改良すべく開拓事業団の先頭で働いたのが愛知県半田市出身の農家・竹内正一(1910-97)さんでした。開拓者として自然と社会の境界に立ち続けた竹内さんの仕事を彼が残した膨大な写真資料の一部をもとに、かつて田んぼだった場所にできたELMや地元中泊の博物館を会場として、いわば里帰りのように展示することで、変わりゆく地域の自然や社会の中で、それらと持続的に関係するための方法について思いをはせていただきます(*2)。

以上のような「旅するケンビ」における美術館と地域の現在の混ぜかえしの先に何があるのでしょうか。実際の堆肥においては土壌の団粒形成を促進し、水もちと水はけを同時によくなるという**一見矛盾した状態**をつくるのが重要な役割の一つですが、そうしたことも作物の生育に適した土壌を整えることを意図して行われるわけです。こうして整えた土壌をさらに耕し、せっかくですからそこに作物の種-新たなアートの発芽を期待したいところです。

*1 採集にあたっては県庁自然保護課自然公園グループに問い合わせのうえ、法律上問題ないエリアで行いました。

*2 写真の現在の著作権者である竹内覚様には今回の展示に際して多大なご助力を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。

「美術館堆肥化計画」のめざす 地域・アーティスト・美術館の 団粒構造



「耕すケンビ 津軽編：みみずの足あと」解説

「旅するケンビ」で美術館と地域の現在が混ぜこぜになったところに新たなアートの発芽を促し、地域・アーティスト・美術館がその成長を共に育ててゆくこと。そこに「耕すケンビ」の意図があります。そうした成長は、人知れず土を耕し続ける「みみず」の営みのようにあると良いと考え、初回となる津軽地域での展開テーマを「みみずの足あと」としました。このテーマは今回の展開会場であるcolere-ON(これるおん)の活動にも影響を受けています。障がい個性として読みかえ、障がいをもつ人もそうでない人も一体となりながら地域の中で生き生きと暮らしていくための場所や方法を模索しようとするcolere-ON。そこを母体とした、現代アーティスト3組による作品制作の展開を紹介します。

参加アーティストについて

アート・ユーザー・カンファレンス (An Art User Conference/以下「AUC」)の活動にふれることは、人知れず土を混ぜかえし続けるみみずの声なき声に耳を澄ませることと少し似ています。AUCは作者や鑑賞者と異なる「user(使い手)」の立場から、既存の芸術概念の問いなおしに基づきネオ・コンセプチュアルな作品を展開する半ばアノニマス(匿名的)な存在です。AUCは今回、世界全体をミュージアムとして捉える「ジェネラル・ミュージアム」の取組みの一環として、津軽地方でのリサーチを手がかりに美術館での「作品」や観光地での「遺跡」とは異なる/通ずるあり方としての「墓」の発見・発掘を、ウェブ上での発表や五所川原市野外での墓石の設置などを組み合わせた形で展開します。そこではミュージアムを実際の建物や空間から解放し、世界全体の中でその概念としての可能性を拡張する意味において、芸術や芸術を支える制度の緩やかな崩壊を促すアナーキーな面を否定することはできません。しかしそうした「崩壊」を、堆肥化の過程で必然的に主題となる有機物同士の「分解」と読みかえることで、AUCの、新たな作物(=芸術)を成長促進させる育み手としての面を指摘することもまた可能でしょう。私たちがAUCから与えられた墓-ミュージアムのつながりと、それらを包摂する世界全体を思うとき。それは人間らしさを保ちながら、より大きな社会や自然とつながるためのシステムを探求することにつながっているのかもしれない。

小田香の映画をはじめとする作品にふれるとき、私には地下通路のドアを開いて、下へ下へと降りていくような感覚があります。あるときユングがフロイトに語った夢-素晴らしい